

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎日、朝礼で理念の音読をし、職員一人ひとりに事業所理念が意識付くようにし、利用者に対して反映できるようにしている。	毎朝、「奉仕の精神」と「安らぎの空間」などが盛られた理念と報告・連絡・相談の大切さを基にした「報・連・相」を唱和し、ホームの目標とする「自然体で生活」すること及び「楽しい日々」を過ごしていただけるようにと所長と職員は日々取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホームでの行事(敬老会やクリスマス会等)の際、地元のボランティアの方々にご参加いただいたり、地元の中学生・高校生の職場体験の一環として、利用者との交流の機会を設けている。	区費を納め、地区の便りや市報の配布などもあり地区の一員として加わっている。近隣の方から野菜の収穫時には差し入れもある。今年は早めにホームの敬老会を開催し、手品やコーラスなどの多くのボランティアの催しも交え家族と共に楽しい一時を過ごすことができた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議を通じ、認知症への理解を深めてもらうよう話し、地区の民生委員の方々も認知症の知識を深めたいとの事で、民生委員の方々への勉強会を行ったりしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	概ね2ヶ月に1回運営推進会議を行い、利用者ご家族様や地域住民の方々の率直な意見や要望を聞き、出来る限り対応をし、ホームのサービス向上へつなげている。	2ヶ月に1回、家族代表、地区役員、市職員、地域包括支援センター職員などの参加をいただき意見交換を行っている。運営推進会議を通じて民生児童委員から中学生のボランティアの受け入れ依頼とお礼、地区の広報へのホームの紹介や認知症対応についてのインタビューを受けるなど、率直な話し合いが発展し協力関係へとつながっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	疑問点等があれば、市の担当の方と連絡を取ったり、運営推進会議の場で聞いたりし、それを活かしながらホームのサービス向上に努めている。	市担当部署とも常に情報交換を行っている。市の介護保険認定調査には家族にも同席していただき、ホームでの日頃の様子などを情報提供している。市から派遣されるあんしん(介護)相談員が毎月1回訪れ、利用者の意見や要望を聴いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	グループホームとしての身体拘束について、行動の拘束・気持ちの拘束などについて施設外の講習会に参加したり、施設内でも勉強会を行い、拘束をしないケアを理解し、日中帯の玄関の施錠等を行わないよう取り組んでいる。	「身体拘束や行動を制限する行為」について職員は十分理解している。月1回開いているユニット合同会議でも時折確認のために話題にしている。また、気になる言葉や対応があった時には合同会議の前にユニット毎に会議を開き注意を喚起している。身体拘束に関わる外部研修にも積極的に参加し、内部での伝達研修も行い拘束のないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ホーム内でどのような状態・変化等あっても虐待を見過ごす事のないようにし、スタッフに対し、倫理観等についての会議や勉強会等を行っている。		

グループホームまめじま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在管理者が勉強をし、理解している状態で、ホームの中核の職員を中心にその勉強した事を伝え、理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に利用料金等の説明を行い、ご家族の方の不安や疑問についても話し、同意・理解をしていただき、契約後や改定時にも疑問点などが出来た場合もその都度説明等を行い、質問等の受付も随時行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書にホーム苦情担当・公的苦情場所を記載し、意見をどこに誰に伝える事が出来るかを明確にし、ホームに意見箱を設置している。あと、意見を伝えやすい環境と言う部分も意識をし、普段のご家族の来所時に話を密にし、ご家族との信頼関係の構築を行っている。	家族来訪時には気軽に声を掛けていただけるような雰囲気づくりに努め、意見や要望をお聞きしている。また、ホーム全体のお便りに担当職員から日頃の様子をコメントとして加え毎月お知らせし、家族との意思疎通を図っている。お聞きした要望等は職員間で共有し、利用者の支援やホームの運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的に職員に対し面談を行い、職員が自分の意見や要望を言いやすい環境を作るようにし、そのなかで出てきた意見や要望を吸い上げ、反映出来るよう心がけている。それ以外にも普段からの職員とのコミュニケーションをしっかりと行い、気軽に意見や要望等を言えるようにしている。	月1回のユニット合同会議では所長はじめ職員間でホーム運営上の課題や利用者のケアの方法などについて活発に意見交換し解決にむけて検討をしている。出された改善策などは職員同士で確認しあい運営や日々のケアに反映している。年2回、職員の個人面談を行い、要望や意見など直接聞く機会を設けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員一人ひとりと定期的な面談を行い、職員の意見等を聞く機会を作り、そこからより良い職場環境等の整備に努めている。後、職員の努力や実績を配慮し、リーダー・主任といった役職になれる体制を作り、昇給等も行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	普段から職員の力量に合わせて指導等を行い、施設内の勉強会を行いつつ、段階に応じて外部の研修受講の機会を設けたり、ホームに外部講師を招いて勉強会を行ったりし、全職員の介護の質の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	各介護サービス種の管理者や運営者と研修会等を通じ、交流を持ち、相互施設への訪問研修等の計画をすすめ、サービスの質の向上に努めている。		

グループホームまめじま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人に寄り添い、出来る限り会話を多くして、本人の不安を解消に努めている。また、本人からの希望や要望等を気軽に話が出来よう環境面の配慮を行い、早期に信頼関係を築けるようにも努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入するにあたり、ご家族は様々な思い(不安や疑問等)を持っているので、その一つひとつに耳を傾け、安心してサービスを開始出来るよう配慮をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	「今」の本人・家族の必要としている支援を見極め、それを反映させていけるよう広い視野で対応方法を模索し、様々な変化にも対応できるように意識をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	相手を尊重する気持ちを常に持ち、会話などを多く行い、同じ空間で生活・支援をしていく中で、信頼関係を築くようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との連絡を出来るだけ取るようにし、状況を報告し、本人にとってより良い生活とは何かを共に考えながら、離れていても「共に本人を支えている」と言う関係が築けるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人・知人の方からの手紙・電話・訪問を受け入れ、馴染みの方々が気兼ねなくホームへ来れるような環境作りにも配慮し、馴染みの方々との関係が途切れない様に努めている。	昔からの友人の訪問を受ける利用者がいる。また、家族と月2回馴染みの処に食事に出掛ける方もいる。お盆や正月に自宅などに外泊される利用者もおり、ホーム利用前からの関係の継続に出来る限りの支援を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が、共に関わり合いが出来るように職員がフォローを入れたりし、関係の調整等をしている。		

グループホームまめじま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	医療機関に入院されたり、他施設へ移られた利用者様やご家族とは、面会させていただいたり、ご連絡をいただいたりし、お話をさせていただき、相談等があった場合、アドバイスとして話をさせていただいている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話だけでなく、ご利用者様の表情や行動等も観察し、些細な変化を見逃さないようにし、そこから希望・意向を見つけ、反映できるよう努めている。	3分の1の利用者は思いや希望等を表出できるが、難しい方には日々の関わりの中で表情や仕草などから感じ取るよう心掛けている。利用者の日頃のつぶやきも大切なこととし記録に残し、職員間の情報の共有に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご利用者様一人ひとりの生活環境や生活歴を理解し、それを職員が共有し、日々のホームでの生活と結びつけ、ケアの取り組みに生かしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の過ごし方を観察し、変化等あった際には記録をし、一人ひとりの特徴をしっかりとつかみ、現在の状態・状況を正確に把握できるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員でカンファレンスを行い、課題やその改善方法等を検討し、それをご家族様へお伝えし、意見等を聞き、今の本人に合う介護計画を作成している。	担当職員が3ヶ月に1回モニタリングを行い、それを基に計画作成担当者を変え、職員全員で介護計画の検討をしている。家族の意見もいただき、3ヶ月あるいは6ヶ月に1回見直しをしている。利用者の状態に変化が生じた時には随時の見直しも行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々のケアの実践経過を記録し、業務内での職員間での話や定期的なカンファレンスを通じ、情報を共有し、改善方法等を模索しながら、介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご利用者様・ご家族の状況により、ホームで支援できる事は出来るだけやらせていただく。また、一人ひとりがその時々生まれるニーズに対し、柔軟な対応が出来るよう職員間で話(カンファレンス等)をし、職員一人ひとり個々のスキルアップにも努めている。		

グループホームまめじま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方々にホームの行事に参加していただいたり、傾聴ボランティアとしてご利用者様の話し相手になっていただいたり、地元の中学生にも職業体験でホームにきてもらったり、協力支援をいただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームで協力医療機関としてお願いをしている病院はあるが、必ずしもここで言う事はなく、本人及び家族の意向を大切に、入居後も同じかかりつけ医でと言う希望があれば継続するようにしている。	利用契約時に説明し、利用前からの主治医の継続あるいはホームの協力医に変更するかは、本人と家族の希望に沿うようにしている。協力病院による往診が月2回行われる他、毎週、訪問看護も受け入れている。また、協力病院の理学療法士の指導を受けている利用者もいる。定期的な受診の付き添いは家族にお願いしているが、希望により職員が代行することもあり家族への報告もその都度行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に看護師がホームへ来て、入居者の方々の健康状態を確認し、ホームの職員とも細かな変化がないか等相談を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、情報提供等を行い、入院中は定期的に病院への訪問や電話連絡等、病院関係者との相談や情報交換等を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ホームでの変化について、定期的に報告をし、状態が悪化した場合、家族にホームへ来ていただき、「今」の本人の状態を見ていただき、そのうえで管理者・担当職員・連携医師等とも話し合い、今後の方向性についてご利用者様本人にとってより良いものになるよう相談している。	協力病院の医師が月2回、訪問看護師が毎週来訪している。また、訪問看護事業所とは24時間体制で連携が取れるため、状態に変化が生じても安心である。重度化した場合の指針があり、契約時に説明している。状態に応じて家族、医師、職員三者で話し合いをし、出来る限り本人と家族の意向に沿えるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	様々な非常事態に備えて緊急連絡網や応急処置のマニュアル等の整備をし、施設内でも緊急対応についての勉強会も行い、各職員の実践力の強化を図り、これらが一時的なもので、実践力が低下しないよう定期的に復習を兼ねての勉強会も行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の対応は避難訓練等を含めて研修を行い、理解を深めるようにしている。地域との協力体制については区長等と検討をしている。	年2回消防署立会いの下、通報・防災・避難訓練を行っている。夜間、各ユニット毎に夜勤者がおり、協力体制は出来ている。また、水・缶詰・オムツなどの備蓄も用意されている。太陽光発電を設置し災害時の停電にも備えている。	

グループホームまめじま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人ひとりの性格・特徴をしっかりとつかみ、利用者の立場にたったケアを心がけ、職員に対し「コミュニケーションの重要性」について指導している。	プライバシーの確保については時折職員会議で話題にしており、常に確認しあっている。ホームの目的と運営方針の中にも「お年寄りの人権を尊重」することが盛られており、利用者の様子を感じ取り、さりげなく声掛けし、ケアに取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者一人ひとりの生活リズムを大切にし、職員が中心ではなく、利用者を中心に考え、希望・要望等をしっかりと聞き取れるようにし、また、利用者が希望・要望等を言いやすい環境作りにも意識をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来る限り「ご利用者様のペース」を大切にし、希望にも添えるようにするには職員はどうか対応をするべきなのかをカンファレンス等を行う中で検討している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみや毎日の服装にも注意をし、1日の中でのメリハリがしっかりとつくようにし、その人らしい格好で生活が送れるようにしている。利用者の希望に応じて地区の理容師に来てもらい、カット等を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ご利用者様と一緒に調理や洗い物など出来る事を職員と共に、「一緒に作業をする事の喜びや楽しさ」を感じてもらえるよう支援を行っている。 食事のメニューについても利用者の好みを踏まえた上で、少しでも食事が量が増加するようなものを意識している。	一人ひとりの食形態に合わせた食事が用意されており、声掛けしながらさりげなく食事の介助をしている。利用者も力量に応じて食事の用意や後片付けを職員と一緒にしている。レク係の職員による食事レクとしておやつ作りなども行われ、誕生日にはケーキが用意されている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量については日々チェック・記録をし、利用者の細かな状態の変化も見逃さないようにし、栄養状態等についてを意識するようになっている。 食事が量が増加するようメニューづくりの際は、利用者の嗜好等を把握した上で、栄養バランスに注意しつつ、作成をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	出来る限りご自身の力でやっていただき、うまく出来ない方には職員が支援したり、歯磨きがあまり好きではないご利用者様にもやっていただけるよう声掛けをするが、利用者の自尊心を傷つけないように気を付けている。		

グループホームまめじま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の状態・状況から排泄の方法について検討し、出来るだけリハビリパンツ等の使用をせず、自然な形で排泄が出来るような対応をしている。	ほぼ半数の利用者が何らかの介助を必要としているが、個々の排泄パターンを把握しており、様子から感じ取り声掛けしトイレでの排泄を支援している。居室での排泄もポータブルにとらわれず、職員間で色々と工夫し自立に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日々の利用者の排便状況をスタッフ全員が把握し、便秘傾向の方には食事で野菜類を多めに取り、飲み物についても色々な種類を用意して、利用者が少しでも水分補給をしてもらえるようにし、スムーズな排便が出来るようにしている。それでも排便のない場合は医師へ相談し、指示を仰いでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者一人ひとりの身体・精神状態に合わせた声掛け等をし、入浴の時間やタイミングの調整をし、安心して気持ちよく入浴してもらえるよう努めている。	ユニット毎に毎日交互にお風呂をたて、それぞれのユニットの職員が一人ずつ計二人で介助にあたり週2～3回入浴している。季節を感じられる入浴となるよう菖蒲湯や柚子湯などの工夫もしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者それぞれの生活リズムに合わせて、一人ひとりが安定した睡眠がとれるように努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬等ないように服薬した事の相互確認をスタッフ間で徹底をしている。薬が変更になった際は経過観察と共に、利用者の状況変化等をいち早く察知し、必要に応じて医師等へ相談を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の性格等を踏まえた上で、日々の生活の中での役割をもっていたり、散歩等メリハリのある生活を行いながら、日々の生活の中にあるご利用者様一人ひとりの「小さな喜び」を大切に支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日々の買い物やドライブ等を行い、それ以外にも散歩へ出かけたりし、体力のない方はホームの中庭へ出て、花壇の水くれを手伝っていただいたりし、各個人に合わせた配慮をしている。	火曜日を外出日としており、ホームの日用品や利用者個々に必要な物の買出しに出掛けている。日々ホームの近隣を散歩し、外気に触れるよう心掛けている。6月には名所となっている隣市のバラ園に外食も兼ねたドライブに出掛けている。この秋には、菊花展にも出掛ける予定となっている。	

グループホームまめじま

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族の協力・理解をいただいた上で、ある程度のお金をご自分で持つ事で安心して頂いたり、スタッフと共に買い物に行き、自分の買いたい物を買えるよう支援したり、「自分で物を買える」事をしっかりと感じてもらえるような取り組みをしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人の訴え等により、電話をかけていただき、ご家族などと話をすることで安心していただいたり、手紙などを上手く読めない方には一緒に読んだり、本人と家族・友人との気持ちが途切れてしまわないよう配慮を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間や各個室等の温度を不快のないよう調整をし、季節にあった飾り等をご利用者様と一緒に作ったり、飾ったりしながら楽しんでもらえるよう工夫をしている。	玄関を入ると広いリビングとなっており、南のユニットの日陰にならないよう事務所を挟んでY字型に北のユニットが配置されており、各ユニットには陽が燦々と差し込んでいた。また、南のユニットは道路に面しているため、日よけなどにより洗濯物や利用者に配慮し、居心地の良い環境づくりに配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間にご利用者様に合った音楽を流したりし、楽しい気持ちになっていただけるよう配慮したり、玄関や中庭には机やいすを用意し、外の風を浴びたい方、一人になりたい方等にも配慮し、活用している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人やご家族と相談をして、入居時には日常生活品等はなるべくご本人が使われていたものをもってきてもらい、居室が本人にとって「馴染みの空間」となり、ホームの生活に少しでも早く馴染めるような取り組みを行っている。	利用開始時に個々の慣れ親しんだ家具や調度品が持ち込まれ、居心地よく過ごせるように自宅の自分の居室と同様の環境作りがされている。居室の表札も一人ひとりの利用者をイメージし、職員により手作りされたものが掛けられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各利用者の出来る事・分かる事を理解し、様子観察をしっかりと行っていく事で、安全と自立のバランスを保つよう努めている。		